オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～

春号
2020 SPRING
VOL.08

巻頭言

鳥飼総合法律事務所 代表弁護士
一般財団法人オレンジクロス評議員
鳥飼重和氏

第5回　看護･介護エピソードコンテスト　表彰式

第5回　オレンジクロスシンポジウム

医療だけで健康は創れるのか
―「社会的処方」の活動を手がかりに、生老病死を住民の手に取り戻そう―

オレンジクロスセミナー

第2回　介護分野の先端技術事情
国立研究開発法人 産業技術総合研究所 招聘研究員
一般財団法人オレンジクロス 理事　岡本茂雄氏

第3回　急速に進化するケアテック
メディカルジャーナリスト　西村由美子氏

賛助会員探訪

株式会社やさしい手(東京都)

財団レポート

①認知症を見立てるって?
②SCN研究の進捗状況報告(2018年度研究内容)

一般財団法人
オレンジクロス

巻頭言

令和時代、信長の失敗から学ぶ

令和時代は、戦国時代

令和時代が始まりました。この時代は大変化の時代でもあり、この大変化に適応するために、大改革が必須の時代でもあります。温故知新の発想から、日本の過去にその例を探せば、信長、秀吉、家康が活躍した戦国時代だと思います。つまり、下剋上の時代です。

従来の支配層にない組織が天下を制する時代だとも言えます。スタートアップ企業が、世界を動かす力を持つ企業になる今の世界と同じ構造の下にあると思います。

信長の発想は、明治時代に日本を世界の強国にした基本精神である「和魂洋才」の発想です。和魂は、聖徳太子に始まる日本の歴史を貫いている「和」の発想を基本としています。

令和時代に適応するには、この「和魂」の発想が必要になります。

では、和魂の発想とは何か？

和魂は、和の精神という心構えのことです。では、和の精神とは何か？それは、受容と多様性を合成した心構えのことです。換言すれば､今流行のインクルージョンとダイバシティによるイノベーションの覚悟のことです。インクルージョンは、異なる文化・技術等を受け入れる受容であり、ダイバシティは、異なる文化・技術などの多様性をさします。つまり、和の精神は、ダイバシティ（多様性）を受容し、時代の変化を積極的に受け入れることでイノベーションを起こし、時代の変化の波を活用して強力な組織をつくる、究極の成長戦略の基本となる精神なのです。

その精神は、世界を制覇する国になったイギリスの精神であり、明治時代に日本を世界の強国にした基本精神であり、心構え（覚悟）なのです。同様の精神は、信長の根本思想でもあります。

信長のイノベーションの成果

戦国時代に、尾張の弱小国から、天下を取る寸前までいった信長の精神も、和魂の精神があります。若い時代に、「天下布武」という歴史を変えるという大目的を掲げ、西洋の進んだ技術の産物の鉄砲を大量に持つのは、和魂洋才そのものです。それによるイノベーションで、時代を味方にして、鉄砲及びそれを活用した戦略で、その時代の最強軍団である武田の騎馬軍団を壊滅させました。つまり、和魂洋才によるイノベーションで、日本の歴史を変えたのです。しかも、徒手空拳の秀吉を織田信長の軍材の最上位の司令官に引き上げました。その手法は、成果主義そのものです。それは、現在の労務の効率性改革に通じるものです。ある意味では、戦国時代の信長に、令和時代の未来が見える気がします。

パワハラで、天下を失った信長

信長は天下人になる寸前で、信長にパワハラされた明智光秀によって死ぬことになります。それは、現在にも見える風景です。有能な中小・中堅企業の経営者が、パワハラによって、経営に失敗するのと同じ風景なのです。和魂の精神を経営者が持てば、パワハラをしないことを受容し、従来と異なる様々な手法という多様性を受け入れ、それを活かすことでイノベーションを起こすという和魂の精神を身に着けることができると思います。

信長の失敗から学ぶ、それが今の経営者に求められているのです。

鳥飼総合法律事務所 代表弁護士
一般財団法人オレンジクロス評議員

鳥飼 重和

第5回 オレンジクロスシンポジウム（2019年7月19日開催）

看護・介護エピソードコンテスト表彰式

「看護・介護エピソードコンテスト」は、家庭やケアの現場で、「日々、看護・介護で活躍されている方々の思いをみなさまと共有したい」との、財団設立者の強い思いにより始まりました。

5回目となる今年も素晴らしいエピソードが数多く寄せられました。ありがとうございました。選考委員会を経て、大賞1編、優秀賞3編、選考委員特別賞1編が決定いたしました。

7月19日の表彰式には、受賞者5名のうち3名の方々が出席され、表彰後に受賞スピーチをしていただきました。欠席された方からは事前に受賞スピーチを頂戴しご披露いたしました。ここでは、代読を含めて4名の方の受賞スピーチをご紹介いたします。

また、今回も受賞者全員で選考委員の秋山正子さんがセンター長を務めておられる「マギーズ東京」を見学し、その後、秋山さんを囲みながら意見交換を行い、受賞者のみなさまから大変好評をいただきました。

本コンテストでは受賞者に副賞として、大賞：30万円、優秀賞：10万円、選考委員特別賞：5万円が贈呈されました。
なお、受賞作品は、財団ホームページ (http://www.orangecross.or.jp/contest/index.php) に掲載しています。

渡辺 勇三さん

古澤 奈都美さん

選考委員特別賞

「傾聴ちょボラ」 渡辺 勇三さん

初めまして。私は、介護・看護の現場ではなく、介護老人保健施設の入所者やデイサービスの利用者の話し相手、「傾聴ボランティア」をやっています。

ボランティアを続けていたある時、施設長から、「俳句や川柳など文芸をたしなむ方が多いので俳句・川柳の“サロン”をやってほしい」という話がありまして、今では、そのグループが口コミでも広がり沢山の方が集まっています。

私自身も川柳が好きで、毎週川柳の集いを開いているのですが、私より年配の方が非常に若々しくなったり、食事の量がふえたり、笑いがふえたり、という好影響も実際にあるようです。私自身も若返ったなと感じております。

この様な活動を続けていくうちに、施設の非常勤職員というお話しもいただき、こんなにうれしいことはありません。何か1つでも自分から進んでやった結果、私自身が年配の方々からパワーをもらっているような感じです。

これからも、入所者、利用者の皆さんのために一層頑張りたいと思います。また、このようなコンテストがさらに輪を広げていくように期待しています。ありがとうございました。

優秀賞

「『対話する』ということ そこから見える本当の願い」 古澤 奈都美さん

本日は、このような賞をいただきまして、ありがとうございます。今、私は精神科で働いていますが、このお話しは、へき地のある総合病院で働いていたときのことです。

実際現場で働いているといろいろな患者さんがおられて、対応に困ったり、悩みながらやっています。このお話しの方は「終末期」にある方で、この方と直接お話しができなければ、ご本人の気持ちに気づかずに家に帰っていただいていて「本当に嫌だ、家に絶対に帰りたくない」という気持ちがわからなかったかもしれません。実際にお話をしたときに、小さな気づきというところから、「患者様が、本当は何を望んでいるか？」「そこに向けてどう動けるか？」、医療者として気をつけながらやらなければいけないなと、とても感じた話です。患者さんを支える役割のご家族に対しても、悩んでいる家族への医療者としてのかかわり、家族も含め、何ができることなのか、これからも学んでいかなければいけないと思っています。

本日は、このような、栄えある式にお招きいただき、ありがとうございました。

優秀賞

「大切な『おはぎ』」 細名 優花さん ※欠席のため代読

この度は、優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。

現在私は、熊本の福祉の大学に通っており、テスト期間中と重なってしまったため欠席させていただきます。

受賞が決まった日、祖母や祖父に電話で伝えると、とても喜んでくれました。私は今年二十歳になったばかりで介護の経験もなく、まだまだ未熟者ではありますが、大好きな介護のことでこのようなすばらしい賞をいただいて、とてもうれしいです。

介護の現場では、毎日利用者様に笑顔にさせていただいています。今回の「大切な『おはぎ』」は、私の中でとてもインパクトのある思い出だったので、たくさんの人に介護の楽しさや、おもしろさが伝わるといいなと思います。

将来は社会福祉士と精神保健福祉士の資格を取得し、福祉の現場で働きたいと思っています。これからいろいろな経験

森川 詩歌さん

を積み重ねて、生涯福祉にかかわっていきたいです。この度は本当にありがとうございました。

オレンジ大賞
「最後の時間」森川 詩歌さん

この度は、このような大変すばらしい賞をいただきまして、本当にありがとうございます。

今回のエピソードの祖父は、病気がわかってから半年ほどで逝ってしまったのですが、その祖父と連れ添っていた祖母は、祖父の病気がわかる２～３年ほど前から、10年以上認知症を患って一昨年亡くなりました。

母は、祖父だけでなく、その祖母の介護にも本当に献身的に携わっていました。先ほど審査員の先生から、“昭和のよくできた女”というお褒めの言葉をいただいたのですが、娘の私からみて母は、ごくごく一般的で、どこにでもいる、本当に普通の母なので、だからこそ、その母が祖父母に心を寄せ、献身的に介護をする姿は、私の胸に迫るものがあり、それまでは遠いことであった「介護」というものが、ぐっと近くに迫ってきて、自分のこととなったきっかけになりました。

結婚をして子供もできた今だからこそ、こういう気持ちになれているのかなと思います。もっと若いころに祖父母が亡くなっていたら、こういう気持ちを感じなかったのかなと思うと、長生きしてくれた祖父母に、心から感謝したいと思います。

この賞は、母と半分ずつで受賞させていただいた賞だと思っています。母は「京都の川下り」に行きたいと言っていたので、母と２人だけで行ってきたいと思っています。本当にありがとうございました。

川名選考委員長よりコンテスト全体の講評

今回で第５回となりますが、集まった作品はこれまでになくバランスよく、とても楽しいエピソードが満載でした。

今回の作品を読んで、介護の仕事というのは、「家族関係を再構築できる最後のチャンスになる」ということや、介護はお節介や人の良さで誰でもできるということではなく、「距離のとり方」が非常に難しい仕事であり、また、「目の前のこと」に振り回されず、「相手が何を考えてこうしたのか？」を考えなければいけない仕事であると、一般の方々にわかっていただければと思いました。「介護は、きつい、汚い」と言われがちですが、それだけではないということを伝えたいと、今回の作品を読んであらためて思いました。

このコンテストは地道な啓発活動だと思いますが、毎回読ませていただくと、現場の方々の経験は日常生活の中にある見えない宝物のようでもあり、埋もれさせるのは本当にもったいないと思います。これから一介護者として、また、当事者として介護に直面する方々の道しるべにもなっていくものと思います。今から来年に向けてエピソードをためて、埋もれさせたくない宝を掘り起こしてください。また、書くという作業は自分の頭を整理する作業にもなり、かつ、記録としても残りますので、ぜひエピソードコンテストを盛り上げていただければと思っています。どうもありがとうございました。

第6回 看護･介護エピソードコンテストの応募要項等については18ページをご覧ください。

第5回 オレンジクロスシンポジウム

講演内容紹介

テーマ：医療だけで健康は創れるのか

―「社会的処方」の活動を手がかりに、生老病死を住民の手に取り戻そう―

慶應義塾大学大学院教授堀田聰子氏を座長に迎え、各講演者の講演を受けて、会場参加者との質疑応答が行われました。

シンポジウムの冒頭に、座長の堀田聰子氏から、今回のテーマの背景にある課題認識やその解決方法の1つとしてのイギリスの「社会的処方」の意義や仕組み等についての紹介がありました。各講演者の講演テーマは以下のとおりです。

【講演者、講演テーマ】（講演順）

・**堀田聰子氏**（慶應義塾大学 大学院健康マネジメント研究科 教授）
「医療だけで健康は創れるのか」
―「社会的処方」の活動を手がかりに生老病死を地域住民の手に取り戻そう―

・**後藤励氏**（慶應義塾大学 大学院経営管理研究科 准教授）
「社会的処方のエビデンス」

・**長嶺由衣子氏**（東京医科歯科大学 大学院医学部付属病院 総合診療科 特任助教）
「社会的処方」の日本の医療機関における展開

・**三上はつせ氏**（医療法人社団 つくし会 新田クリニック 看護師長）
「社会的処方」―新田クリニックの現状―

・**澤登久雄氏**（社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 地域ささえあいセンター センター長）
『社会医療法人仁医会から見た「地域ささえあいセンターの意義」』―病院機能が、地域の健康を支える拠点であるために―

・**近藤尚己氏**（東京大学 大学院医学系研究科健康教育・社会学分野 准教授）
「今、なぜ日本に社会的処方が必要か」

堀田聰子氏

後藤励氏

長嶺由衣子氏

三上はつせ氏

澤登久雄氏

近藤尚己氏

【ディスカッション】

各講演者の講演後に会場の参加者から次のような質問・意見等がありました。

・社会で孤立している人を見つける取組みなどについて教えてもらいたい。
・医療・福祉分野、地域包括ケアでの学校とのかかわり方、学校とどうつながっていくのか、その良いやり方があれば教えてほしい。
・イギリスの家庭医は、社会的処方を行うことにより、何らかの報酬を得るようになっているのか。
・患者さんが語ることを「手がかり」にすれば、社会参加ができていく道筋がわかるのではないか。医療だけの視点では「つなぐ」ことはむずかしいと感じる。

各講演者の講演資料は、財団ホームページをご覧ください。
シンポジウムの詳細（講演録）についても、ホームページに掲載予定です。

講演要旨　第2回　オレンジクロスセミナー（2019年9月20日）

【演題】介護分野の先端技術事情

最先端技術の開発は介護分野に何をもたらすか。オレンジクロス前理事長で現在、国立研究開発法人「産業技術総合研究所」招聘研究員岡本茂雄氏を招き、介護の未来について講演していただきました。

介護保険分野ではIoTによるビッグデータの活用、介護ロボット、AIなど先進技術の採用が進み始めました。今後の介護分野での先進技術の動向とそれに基づく介護の進化について述べたいと思います。まず、介護分野の人であっても介護保険の理念や仕組みを正しく理解しているかといえば、じつはそうでないことが課題です。個別の点数のことを知っていても介護保険の理念や流れを理解していなければ良い介護にはならないのです。そこで、まず介護保険の画期的な点を説明しましょう（中略）。地域包括ケアシステムにおいては、地域によって社会資源が異なることも知っておく必要があります。介護保険では、事故が起きる前の予防を給付することや、ケアマネジメントの仕組みはきわめて画期的なことなのです。しかし、それを理解し、どんどん進化させていないのも問題です。例として、大学には、いまだに介護学科がないのはなぜなのか。ぜひつくるべきだと考えます。

さて、介護保険の予算は年々増加する中で、訪問介護、デイサービス、訪問看護、訪問入浴などにおいて同じサービスが提供される重複部分が大きな無駄になってきています。いわゆる「種類別」の体系から、入浴介助や食事介助といった「機能別」体形に変えていく必要も、声高に言われ始めました。

一方、これまで急激に増えてきた75歳以上の高齢者の人口は2025年から2040年までにたった48万人しか増えません。ほとんどの地域では高齢者は減少に向かうので介護保険の「量」への対応は2024年で終わりです。特養を作ってもすぐに余ります。一方、日本はあらゆる分野で人手不足になるのに、介護だけは給与を上げれば人が増えるといった旧態依然とした考えでは人は集まらないと思います。他の産業分野よりも、魅力ある仕事にせねば、人は集まらないのです。

AI、ロボット、センサー、来年商用化される5Gなどなど、異なる分野の専門家が介護・医療、ヘルスケアのことを考え始めています。これからそうした“天才たち”が介護分野に入ってくると思います。またロボット介護機器分野では、業務負担軽減型から自立支援型へと変わってきており、ある意味、介護分野を先取りした動きもあるのです。介護はすでに、変わりつつあるのです。

さまざまな介護行為がなぜ行われるのか、どんな風に効果を上げるのかなどを、AIが構造化する研究も、すでに産総研で行われています。介護は医学や物理学よりもより複雑な要素が絡みあっており、「気持ち」や「雰囲気」といったことも科学的に解析し、データとして扱い始めるとケアプラン、介護評価の在り方が大幅に進化すると思います。

既存のデータでも、たとえば「安楽な姿勢」といっても看護職と介護職では意味が異なります。看護師は横隔膜が動きやすく呼吸のしやすい姿勢だと言い、ヘルパーはテレビを見やすくくつろぐ座り方を指しています。同じ言葉なのにふたつの意味があり、業務記録を単純に集計できないことになります。記録の取り方も変えていく必要があります。施設によっても業務の組み合わせが違ったりします。これらの違いを理解し共有しないことには介護の科学は進化しないと思います。逆にこれらがクラウド空間や業務支援システム、AIによる読み替えなどで円滑に情報共有が進めば、サービスの質が一気にあがって進化すると予想されます。

今後、センサー、ロボット、またAIなどで膨大なデータが集まり、整理できるようになります。ここに膨大なデータを集めて分析すると、あらゆる面で介護は進化するでしょう。

このことから、皆様には進化を実現するプロジェクトにどんどん参加してもらいたいと考えます。介護の進化には、現場の皆様の参加こそが重要なのです。

講演要旨　第３回　オレンジクロスセミナー（2019年11月15日）

【演題】急速に進化するケアテック

第3回オレンジクロスセミナーは、日米の医療介護に精通し国際間にまたがるビジネスプロデューサー、ライターの西村由美子氏を招き、最新のケアテック情報について講演していただきました。

不老不死の社会を見据えて

米国の未来学者のカーツワイルはしばらく前から「2040年には不老不死が実現する」と公言しています。米国では未来学者だけでなく、科学者もまた一般の人も「不老不死」を実現する技術や、不老不死が実現する未来の世界について考え、語っています。

日本では、まだ人が年をとらない、あるいは死ななくなる社会のありようなどは真面目には議論されていないのが現状ではないかと思いますが、日本でも、これからは、ウエルエイジングで考えるのか、アンチエイジングで考えるか、あるいは不老不死で考えるのか、議論のテーマや角度が変わってくる時代になると思います。

さて、不老不死を真面目に考えているアメリカ人の、現在の一番の期待はナノレベルのロボットの完成です。体内に注入された目で見ることもできない小さなロボットがDNAの損傷を修復し、逆にガン細胞などは叩いて殺してしまいます。これが実現すれば「老い」はもはや不可逆的なプロセスではなく、食い止めることができる現象になると考えられています。

今の中高年がその恩恵にあずかれるかどうかは別として、将来にはそういう時代が来る。アメリカでは、こういう未来観を前提とするビジネスが既に存在します。

極端な例では、たとえばAlcor延命財団（https://alcor.org）というビジネスがあって、遺体を冷凍保存して預かるサービスを提供しています。未来に生まれ変わってさらに生きたいという高齢者から、今は治療法のない病気で死ななければならないけれど、その治療法が完成した未来の時代に蘇って病気を治して続きの人生を生きたいというティーンエイジャーまで、約2,000人が冷凍カプセルの中でその時が来るのを待っています。カプセルの名前はTime Ship（時空を旅する船）。身体1体約1億円、脳だけなら2～3,000万円で保存してもらえます。

医療技術の進化が「生と死」を、ひいては「人間」を再定義

心臓移植が定着したことで、人の「死」の定義は心臓死から脳死に変わりました。心臓移植の待機患者用に開発された人工心臓、例えばSyncardia systems(https://syncardia.com)は、全置換型人工心臓での5年以上の生存例を記録しており、近未来における埋め込み型人工心臓の実用化が期待されます。

Nectome(https://nectome.com)は－135℃でウサギの脳を冷凍保存する技術を開発した会社ですが、脳のデジタル情報をコンピュータ内に保管する「マインド・アップローディング」の技術で脳のコピーをクラウド上に保管する技術の実用化も視野に入れていて、注目されています。

心臓移植のレシピエントが個人のアイデンティティを問われたという話は聞きません。が、人工心臓を故意に止めたら殺人や自殺になるのでしょうか？また、脳の移植が定着したら、個人のアイデンティティは脳の持ち主のものでしょうか？脳を移植した身体を提供したレシピエントのものでしょうか？医療技術の急速な進歩にともない、法制度・社会規範の見直しが急務ですが、いずれも追いついていません。

John's Hopkins大学と国防総省のDARPAが共同で開発した世界初のスマート・ロボットアームは「動かそう」と考える脳の電気信号をワイヤレスでスマート義手に伝えることができ、考えた通りに義手の指や手を動かすことができます。ピアノを弾いたり、キーボードを叩いたりできる義手の映像がYouTubeにアップされています。こうした義肢の発達は別の議論を呼んでいます。かつてブレード・ランナーの異名をとった南アフリカの陸上選手が両足に義足をつけてオリンピックで優勝しましたが、義足の性能がどこまで記録に貢献しているか？が評価できないとして、以後はオリンピックに出場できなくなりました。

自由市場がイノベーションを推進する

GDPの20%に迫るアメリカの医療費は「高すぎる」と常に批判されていますが、視点を変えれば、米国の医療市場は世界最大で、世界中の企業が参入したいと狙っている市場だと言えます。

米国では「医療技術で世界をリードする」という考えが徹底しているので、研究開発への投資を惜しみません。一方、革新的な成果については、最初に市場に登場する時点での価格が高いのは仕方がないとも考えます。米国市場に世界中からイノベーターが集まり、次々と技術革新が生み出されている背景には、常にイノベーションの最先端を目指し、様々な課題は行政規制ではなく「市場」のイノベーションで解決するという米国の姿勢とエコシステムがあると言えます。

一方、医療現場では、最新技術の導入に資金を投入できるよう、現行の医療制度の無駄を省き、可能な限りコストを削減し、非効率を排除して費用を捻出しようと考えています。デジタルヘルスやAI等々のテクノロジー導入にはコスト削減や効率化が期待されています。

テレヘルスにはとりわけコスト削減効果が期待されています。Tytocare(https://www.tytocare.com)は、初めての「家庭用」デジタル診断機器セットを家電量販店で発売開始しました。プロの世界では、例えば訪問看護の場面では、ワイヤレスのデジタル診断機器：聴診器やEKG、血圧計、超音波診断器などがすでに一般的に常備されています。こうした機器の進化がテレヘルスの普及を後押ししています。

音声認識・合成技術の進化で「声のアシスタント」が普及し、高齢者に使いやすくなったことでも、テレヘルスを利用した高齢者の見守りや在宅患者のリモート・ケアが急速に普及しています。

たとえばSensely(https://sensely.com/about/)は、多言語対応可能なアバターのコンパニオンが提供する在宅ケア・サービスです。社員の健康管理用に企業にも採用されています。

2019年にはアマゾンエコー(Alexa)がHIPAAコンプライアントになって注目されました。すでに糖尿病患者の疾病管理サービスLivongo(https://www2.livongo.com)で声のアシスタントとして活躍しています。

世界規模のクリニックが誕生する

米国ではテレヘルスを基盤にしたまったく新しい医療機関が誕生しています。量販店やドラッグストアが展開するコンビニ・クリニックです。大手量販店ウォルマートのCare Clinic(https://www.walmart.com./cp/care-clinic/1224932)は医師とは必要な時だけテレヘルスでつなぎ、普段はナースプラクティショナー、フィジシャンアシスタントなどがサービスを提供することでコストカットを実現しました。買い物ついでに寄れるだけでなく、夜遅くまで開いているので大変便利です。

アマゾンが社員向けにスタートしたAmazon care(https://amazon.care)は、クリニックを持たないテレヘルス基盤のサービスです。地域の医療サービスプロバイダーと連携し、オンラインで診察（必要に応じて往診）、処方せんはアマゾンのオンライン薬局と宅配サービスに連動していて薬は自宅や会社に届きます。

Amazon careのサービスがアマゾンのネットワークを通じて一般公開されたら、あっという間に世界規模のクリニックができあがります。こういう時代、既存の医療機関は今後どうなっていくのでしょうか。

2019年1年を振り返るだけでも、技術進歩に伴ってさまざまな新しいサービスが登場しました。これら最先端の技術は今後米国だけでなく世界中に波及していくと考えられます。日本の医療や介護の将来も、アメリカ発含め、世界的な変化のトレンドの中で考えていく必要があると思います。

賛助会員探訪

東京都　株式会社 やさしい手

「自然に地域交流が生まれる、多世代共生のすまいを目指して」

やさしい手について

訪問介護・看護、定期巡回、デイサービス、福祉用具貸与・販売、ショートステイなど、お客様のニーズに合わせた多様な居宅介護サービスを展開しているのが「株式会社やさしい手」です。さまざまな事業を通じ、「住み慣れた地域で安心して、いつまでも暮らし続けたい」というご高齢者とそのご家族の思いを支えています。

やさしい手が運営する、サービス付き高齢者向け住宅「コーシャハイム千歳烏山」が誕生したのは2014年のこと。ご入居者に安心して暮らしていただくためにどのような工夫をされてきたのか、その結果どのような効果が生まれているのか、そしてこの5年間を振り返っての思いなどについて、支配人の森田雄二さんとレストラン事業部部長の曾澤崇利さんにお話しを伺いました。

支配人の森田雄二さん

“多世代共生の住まい”を目指すべく誕生

東京都は現在、医療や介護が必要になっても住み慣れた地域で生活できるよう、医療・介護・住宅の三者が連携した「サービス付き高齢者向け住宅」の整備に力を入れています。サービス付き高齢者向け住宅「コーシャハイム千歳烏山」は、そのモデル事業としてスタートを切りました。

「介護に関する豊富な実績を持つ『やさしい手』と、地域に根付いた医療サービスを提供する『医療法人社団はなまる会』、そして東京建物グループの介護事業を担う『東京建物シニアライフサポート』の連携のもとに、“多世代が共に生き、地域との交流を楽しむコミュニティーの創出”を目指すプロジェクトとして生まれました」（森田さん）

自分のライフスタイルに合わせ、安心して住み続けられる場として機能しています

「コーシャハイム千歳烏山」の1～8号棟は一般住宅、9～10号棟はサービス付き高齢者向け住宅として、また11号棟は一般住宅とサービス付き高齢者向け住宅が半々の割合で利用されています。

「サービス付き高齢者向け住宅のご入居者数は94名で、女性が7割、男性が3割という比率です。平均年齢は83歳、介護度の平均は1.5。介護保険での介護サービスを必要としない自立された方も多く住まわれています」（森田さん）

ご入居者は世田谷や調布、三鷹などの近隣エリアの方が中心ですが、ご家族が地方から親御様を呼び寄せて住まわれるというケースも増えているといいます。

「コーシャハイム千歳烏山」は住宅のみならず、地域交流レストランやカフェ、保育所、クリニックなども併設しており、小さなお子さんから高齢者の方に至るまで、多世代交流を実現しています。

会話を通じて、あるべき姿を探る

サービス付き高齢者向け住宅「コーシャハイム千歳烏山」が誕生した当初は、ご入居者がどんなサービスを求めているのか分からず、何もかもが手探りだったといいます。現在では、5年前の立ち上げ時から入居されている方が7割を占めるまでになりました。居心地のよい環境を作り上げていくために、スタッフの方が大切にしてきたのは“ご入居者との会話”でした。

「お食事については、季節感の感じられるメニューを意識し、定期的にご入居者のご意向を伺いながら、味付けの好みや体調に合わせた献立を考えてきました。また飽きがこないようにメニュー改定なども行なっています」（曾澤さん）

「ご入居者との距離感についても、日々の会話を通じ徐々に分かるようになりました。過介護に気を付け、ご入居者にできるところはやっていただき、できないところはどのようにすれば

サービス付き高齢者向け住宅「コーシャハイム千歳烏山」の特徴

■24時間の介護サポート

館内に「やさしい手巡回型訪問介護事業所」や「やさしい手居宅介護支援事業所」を併設し、お一人お一人にあったケアプラン、介護サービスを提供しています。

■医療連携

「医療法人社団はなまる会」による訪問診療・往診、訪問看護、「やさしい手」による訪問介護、デイサービスなど、医療と介護の連携によりサポート体制の整った暮らしを実現しています。

■お食事

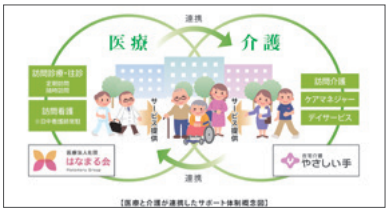
季節感の感じられるお食事やご入居者ごとの趣味嗜好に沿ったメニューの他、健康や体調に合わせたメニューを提供しています。

■居室

火事の心配が少ない IH クッキングヒーター、車いす対応のキッチン、段差のないバリアフリー設計、手すりの設置、車いすでも移動しやすい間口の広い引き戸、生活異変センサー、緊急呼び出しボタンなど、安心・安全な環境を整えています。

■コンシェルジュサービス

日中は福祉や医療の資格を持つコンシェルジュが在席。暮らしの中の不安や気になること、お困りごとに寄り添いながら、ご入居者の安心な生活をサポートします。



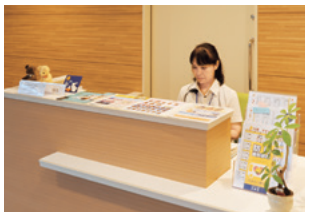
医療と介護の連携で安心して暮らせる土壌に

12 号棟に入るクリニック

ご入居者の動きを検知する
生活異変センサー

手すりや滑りにくい床で転倒などを予防

介護機器用コンセントも完備しています


困ったときに頼りになるコンシェルジュ

できるようになるのか、話し合いながらサポートしています」（森田さん）

サービス付き高齢者向け住宅は、あくまでご入居者のご自宅。どこまで介入すべきか、そのバランスの見極めが難しかったと森田さんは語ります。また、体操やデッサン、歌声サロン、折り紙、住民交流会など、さまざまなイベントについてもご入居者のご希望を踏まえて、生活に彩りを、という企画に力を入れてきました。

「ご入居者から『ここに来てよかった』というお言葉をいただけたときには、心の底からよかったなと思いましたね。今でも思い出に残っているのが、ターミナル期を迎えられたご入居者のことです。病院から緩和ケア病棟に入院できるという話があったそうなのですが、『病院よりもここにいたい』と仰ってくださって。最終的にはこちらでお看取りをしたのですが、選んでいただけたというのがすごく嬉しかったですね」（森田さん）

働くスタッフの自主性を伸ばす環境づくり

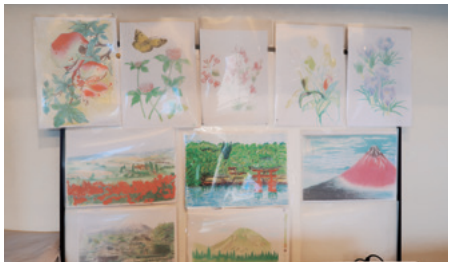
ご入居者の生活をそばで支えているのは、やさしい手のスタッフたちです。スタッフが働きやすい環境を作るために、どのようなことを心掛けているかについても支配人・森田さんにお伺いしました。

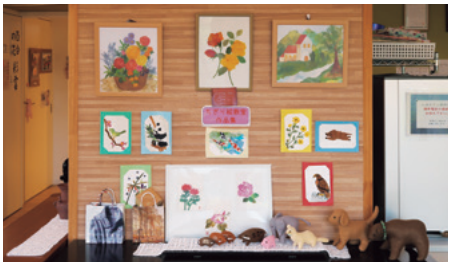
「『こうあるべきだ』という指導はなるべくしないようにしています。例えばサービスの提案にしても、何が正解かは分かりませんし、色々な考え方があって当然ですから。まずはスタッフがどうしたいかを確認して、『まずはやってみよう』というところから始めるようにしています」（森田さん）

そして取り組みを振り返って次に活かす、ということを繰り返した結果、現在の「コーシャハイム千歳烏山」が形作られているのだとか。これからもこのスタンスは変わらないそうです。

ご入居者の方が気持ちよく過ごせる場所だけでなく、スタッフが楽しく働ける場所でもあってほしい、という思いを持って運営されている森田さん。「コーシャハイム千歳烏山」が上手く機能しているのは、こういった努力や配慮の賜物ではないかと感じます。

行事や季節を感じられるメニューの数々


ご入居者の方々によるデッサンの作品集


生活に彩りを与える企画もたくさん

レストラン運営に携わる曾澤崇利さん

自然と地域交流が生まれる場に成長

また、10号棟にある地域交流レストラン「てらすチトカラ」は、ご入居者と地域の方々の接点を持つ重要な場として発展してきました。現在、こちらではレストランやカフェとしての利用だけでなく、週に1～2回の頻度で地域の方々も参加できるイベントを開催しています。

「オープン当初はガラガラでしたが、今では高齢者の方がケーキを食べて談笑していることもあれば、PTA や商店街、保育所のママ友の方の集まる場にもなっています。ときには、サラリーマンの方がコーヒーを飲みながら PC 作業をされている光景も目にするように。少しずつ地域の方々にご利用いただけるようになり、感慨深い思いです」（曾澤さん）

地域の方々と自然に交流できる場があることも、ご入居者が長く住み続けたいと思える理由の一つになっているのでは、と森田さんと曾澤さんは考えています。

「団地の一角にサービス付き高齢者向け住宅があるというのも、一つの魅力ですよね。団地の外ですと、このような一体感は生まれなかったのかなと思います」（森田さん）

カフェやクリニックと連携した夏祭りの開催

3年ほど前からは、「コーシャハイム千歳烏山」内のイベントに留まらず、12号棟にあるコミュニティカフェ「ななつのこ」や保育所「ポピンズナーサリースクール千歳烏山」、クリニック「烏山はなクリニック」と連携した夏祭りやハロウィンイベント、防災イベントなども開催するようになりました。

「どの皆さんも地域の交流を大事にしたい、地域の方々のために何ができるか考えたい、という思いをお持ちなので、互いに協力し合って進められることがとてもありがたいです」（曾澤さん）

今年の夏祭りは、大々的な告知はしなかったにも関わらず大盛況で、延べ300人もの方々に参加していただきました。昨年・一昨年のお祭りの様子がクチコミで広がり、「コーシャハイム千歳烏山」の住民の方だけでなく、近隣の方々の参加者も多くありました。

たこ焼きや焼きそばの出店、子どもみこしなど、さまざまな催し物の中で、特に盛り上がりを見せたのはフラダンスや歌の発表会だったそう。

「ご入居者の中には、フラダンスや歌の趣味サークルに入っておられる方もいます。練習はしているけれど発表の機会がないというお声もあったので、それならぜひ夏祭りの場を使っていただきたい、と募集をかけたところ、8グループほどが手を挙げてくださり、発表会を開くことができました。中でもフラダンスは立ち見も出るほど大人気だったんですよ」（曾澤さん）

近隣地域にお住まいの方々とも交流できる「コミュニティカフェななつのこ」

みんなで協力した夏祭り。参加者からの評判も良く、喜びもひとしお

多彩なイベント運営に力を入れています

ご高齢の方だけでなく、子供からファミリー世代まで、多世代交流を実現

徐々にご入居者に変化が生まれてきた

「コーシャハイム千歳烏山」が誕生して5年。森田さんはご入居者の変化を感じているといいます。

「特に実感しているのが、地域交流レストランでのご入居者の滞在時間が長くなったことです。2年前は、ご飯を食べ終わったらすぐに部屋に戻られる方が多かったのですが、だんだんと輪が広がっていく中で、食後にケーキを頼んでおしゃべりをする光景も珍しくなくなりました。自分が好きなように、自由に過ごしていらっしゃる姿をお見掛けすると、よい雰囲気になってきたなと思いますね」（森田さん）

また、個々の活動も活発になってきました。地域交流レストランのイベントや、ご入居者を含めた活動はもちろん、麻雀や歌のサークルなども次々と誕生しています。

「麻雀がしたい、というご入居者からのご要望を受け、メンバー募集のお知らせを掲示板に貼ってみては？ とご提案しました。サークル活動については、私たちスタッフもお手伝いはしますが、ご入居者が主体で動かれることを大切にしています」（曾澤さん）

「たまには一緒に麻雀をしようよ、とお誘いをいただくことも多いんですよ。さすがに仕事中は遊ぶわけにはいきません、とお断りしていますが（笑）」（森田さん）

こういった会話からも、ご入居者とスタッフの間に心地よい関係性が築かれていることが伝わってきます。

全面ガラス張りの自然光が差し込むレストラン

誰もがふらっと立ち寄るれる居心地のよさがあります

さらに居心地よい場所を目指して

「安心・安全に過ごせる居室」、「24時間の介護サポート」、「医療連携」、「地域交流ができる場」が相乗効果を生みました。また、ご入居者とスタッフとの会話を通じて、サービス付き高齢者向け住宅「コーシャハイム千歳烏山」はさらに居心地のよい場所へと進化を遂げています。やさしい手では今後もご入居者のニーズに沿った取り組みに着手する予定で、そのひとつがイベント企画です。

「5年にわたって『サービス付き高齢者向け住宅』独自のイベントを開催してきましたが、マンネリ化している部分もあると思うので、より一層楽しんでいただけるような形へとパワーアップさせていきたいと考えています。今後は地域ボランティアさんの力を借りることも視野に入れながら、ご入居者もスタッフも楽しめるイベントを作っていきたいですね」（森田さん）

また、新たなサービスについての構想もあるのだとか。
ご入居者が「ここで過ごしたい」と望んでも、ご家族のご要望で病院に入院されることもあれば、予期せぬ事故や急な発作で救急搬送され、そのまま帰らぬ人に…というケースも。
「全てが全てご自身のニーズにあったサービスをご提供できているとはいえない」と森田さんは語り、ご入居者が自分の希望通りの人生を歩めるように、エンディングノートに関するセミナー開催も視野に入れています。

「以前、稲城市にあるサービス付高齢者向け住宅『コーシャハイム平尾』でお看取りセミナーを開催したところ、大きな反響があったんです。終活への興味・関心の高さには、時代のニーズを感じました。千歳烏山でもそういったような取り組みを始める時期なのかなと思います」（森田さん）

やさしい手では、サービス付き高齢者向け住宅の他、デイサービス、居宅介護支援、訪問介護、定期巡回など、さまざまな居宅介護サービスを展開しています。

「サービス付き高齢者向け住宅のご入居者だけでなく、この地域に住んでいる方々も介護に関する問題を抱えずにお過ごしになれるはず。例えば、クリニックさんと連携して定期巡回をしたり、往診をお願いすることもできます」（曾澤さん）

ご入居者だけでなく、地域全体を支える存在を目指していきたいとのこと。

一人でも多くの方の「住み慣れた家で最期まで生きる」という願いを叶えるため、やさしい手の挑戦はこれからも続いていきます。

DATA

株式会社 やさしい手

東京都目黒区大橋2-24-3 中村ビル4階
http://www.yasashiite.com/

財団レポート1

認知症を見立てるって？

小林美亜（静岡大学 創造科学技術大学院 特任教授）
石川翔吾（静岡大学 情報学部 助教）
上野秀樹（千葉大学 医学部附属病院 地域医療連携部 特任准教授）

現在、(一社) みんなの認知症情報学会、静岡大学、当財団の共同研究として、人工知能学に基づく「認知症見立て知」の共学・共創システムの開発と実証評価の研究を進めています。改めて当研究の背景や意義、研究内容の一部についてご紹介します。

●認知症の見立ての重要性

認知症の状態像を適切に見立てることは、当事者の方の健康な生活を維持したり、QOL（生活の質）を高めたりするために、とても大切になります。回復につながる改善可能な認知症の要因には様々なものがあります。例えば、内服している薬剤が認知機能の低下を引き起こしている場合、薬剤を中止あるいは調整することで、通常の認知機能の状態に戻すことができます。しかし、薬剤による認知機能の低下が気づかれないまま見過ごされてしまうと、認知機能がますます悪化したり、処方カスケードの問題を招いたりする危険性があります。

処方カスケードは、薬物の副作用を新たな疾患の症状と思い込んで、そのための薬物を処方し、今度はその副作用が出現すると、同様に、また何かの疾患と診断し、次の薬物を処方するといった負の連鎖のことをいいます。幻覚症状が現れた高齢者女性が、レビー小体型認知症の疑いで抗認知症薬が処方され、この薬の内服を開始してから手の震えが出現するようになり、抗パーキンソン薬も処方されてしまったというのが、処方カスケードの例です。この高齢者女性に現れた幻覚は睡眠薬の副作用によるもので、もしこのことに早期に気づくことができたら、悪循環に陥ることはありませんでした。

しかしながら、認知症の状態像を適切に見立てることは一筋縄でいかないことが多いのが実情です。認知症に関わる3つの簡易検査結果と、認知症を詳細に評価し、診断した結果を比較した米国の研究では、その参加者の36%（301人）が少なくとも一つの簡易検査で認知症と誤判定されていたことを報告しています。簡易検査だけで判断せざるを得ないようなプライマリケアの診療現場では、情報も不足しており、認知症を正確に診断することは難しく、簡易検査はあくまでのスクリーニングツールとして活用することの重要性を説いています[1]。

以上のことを踏まえると、身近にいる介護者や関わりのある専門職が、「認知症の見立てのために必要となる情報」や「見立て方」についての『知』を習得し、かかりつけ医に診断のための適切な情報を提供することが大切であるとわかります。

●人工知能学に基づいた認知症の見立て

一口に人工知能と言っても様々な思想があり、人間が行う活動の一部を何らかの方法（必ずしも人間の思考が再現できなくてもよい）で代替する「特化型人工知能（特化型 AI)」と人間の思考を理解して人間を中心とした能力拡張を目指す「人間中心人工知能（人間中心 AI)」に大別することができます。特化型 AI は、自動車運転技術、画像認識、将棋・チェスなど、特定の分野を学習して、正解が一つであるような場合、その一つの課題に対して作業を遂行することのできる人工知能です。それに対し、人間中心 AI は、人間のように「思考」し、「意味」を理解したり、「状況」を考慮したり、状況に応じて対応のできる人工知能です。

例えば、認知症の方に生じる暴力・暴言といったチャンジグ行動（当事者の方が困った状況を何とかしようとしたり、

あるいはその思いを周囲に伝えようとしたりした結果、現れるもの）は、自分の思いが相手に伝わらない苛立ちかもしれないですし、便秘による不快感といった身体の不調によるものかもしれないですし、その他にもいろいろな要因が考えられます。個々の置かれた状況によって、その意味は全く異なることから、「暴言・暴力」の出現をその方が体験している（体験してきた）世界の物語のなかで、意味づけや解釈を行うことで対応も変わってきます。

このようなことを思考できる人間中心 AI は、依然として発展途上です。そこで、まずは、人間がどのように一つひとつの言葉や行動などを意味づけ、状態像を理解し、対応しているのかといったことを構造化することで、暗黙知を形式知に変え、『知識』を共有化することのできる基盤を構築していくことが必要になります。暗黙知とは、個々の体験や経験に基づいた、個々の信念や価値等も含んだ知識であり、他者に説明することが難しい知識です。それに対し、形式知は、形式的・論理的言語を用いることで他者に伝達することのできる知識です。個々の暗黙知が形式知として共有され、『知識』が増えていくと、認知症の方の一つの状態像を多面的に捉え、様々な意味づけを行いながら、個人の状態にあわせた見立てを行い、対応ができるようになります。このようなプロセスを踏んで学ぶことのできる場が、「みんなの認知症見立て塾」です。

●みんなの認知症見立て塾

見立ての軸となる知識は、医師が認知症の状態像を探るプロセスがベースになっています。症例を活用しながら、表1に示すステップで検討していきます。症例を題材にして、学習を進める形式としていることから、症例が変われば異なる側面が表出され、新たな知識がふえることになり、様々な症例を通じて、継続して学習することが可能になっています。

また、ケースメソッドアプローチを参考に、症例の検討をまず個人で学び、次にグループワークで学び、そして総合討論で全体で共有しながら学びを深めるという流れで進行していきます。参加者同士のインタラクションを活発化するグループワークを中核とし、協調的に様々な意見を出し合いながら自発的に学ぶことを重視しているのが特徴です。加えて、症例に対する結論はあえて出さず、症例の情報をあえて少な目に提示することで、自分のこれまでの過去の体験等を踏まえて、その行間を考えさせ、さまざまな可能性があることに気づけるようにしています。

例えば、症例に「幻覚が出現するようになった」ということが書かれていれば、「事実①睡眠薬の残薬の数があわない⇒睡眠薬を多く飲んでいる可能性がないのか？」、「事実②眠れないとよく言っていたが、最近、眠れないという言動が聞かれなくなった⇒事実①も踏まえると、眠れないので睡眠薬を自分の判断で倍量飲んでいる可能性がないのか？」、「事実③眠れないという言動が聞かれなくなってから、それまでなかった手の震えが出現している⇒睡眠薬を倍量飲み始めたことによる副作用による幻覚の可能性があるのではないか？」というように事例で把握できた事実からその状況を解釈し、意味づけることのできる力を習得できます。

｜表1｜ 認知症見立てのステップ

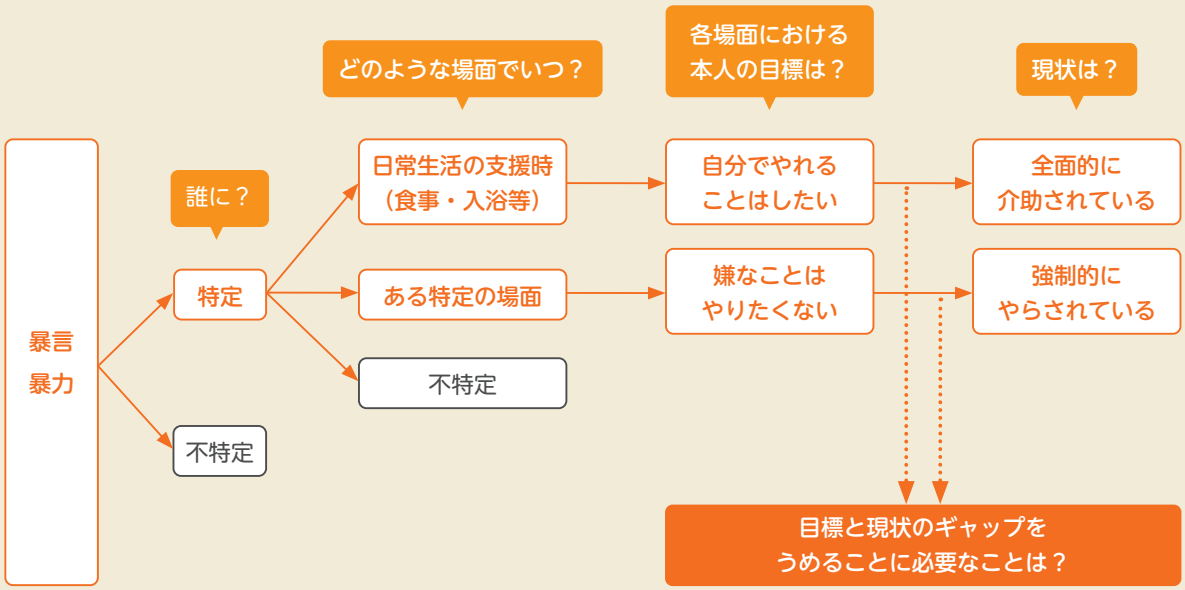
ステップ	項目	詳細
1-1	状態の評価	生活障害の評価
1-2		認知機能障害（記憶障害、見当識障害等）の評価
1-3		精神症状の評価
2	改善可能な側面の検討	せん妄状態、薬剤の副作用、うつ病、正常圧水頭症、慢性硬膜下血腫、甲状腺機能低下症、ビタミン B12欠乏症、等
3	疾病の判断	脳血管性認知症、レビー小体型認知症、アルツハイマー型認知症

●ケアによる改善可能な認知症の見立て

改善可能な部分の見立ては、医学的側面だけではなく、ケア的側面でも求められます。ケアによって改善可能な部分もあります。そこで、ケアに改善可能な認知症の見立て知を構造化し、モデル化を図ることで、この知識を共有できるようにしていくことも大切になります。

例えば、暴言・暴力の要因として、医学的側面として治療が必要となる「せん妄」や「身体の不快症状」などが認められなければ、ケア的側面から改善可能な要因を探ることになります。まず暴言・暴力の対象や場面を同定し、その場面における個人の望むこと（目標）をパーソナル情報（これまでの経験・仕事・役割・性格等）に基づいて明らかにし、それに対して現状がどのようになっているのかを把握することにより、そのギャップ（差異・差分）が浮かび上がります。そのギャップが解消されるように上手く働きかけることができれば、暴言・暴力を軽減したり、なくしたりすることができる可能性があります。

｜図1｜ ケアによる改善可能な見立て



●おわりに

認知症を見立てることができるようになると、医療者でなくでも、改善可能な認知機能の低下要因に気づけるようになります。また、その気づきに基づいて考えることにより、当事者に対する理解も深まり、当事者と良好な関係を築き上げることにもつながります。多種多様な人を理解するためには、みんなの「知」を寄せ集め、共有し、使えるようにしていく必要があります。みんなの認知症見立て塾を通じて、「知」を集積することのできるデータベースを構築し、「知」を構造化することが重要になると考えています。

【文献】
1.Janice M. Ranson, Elżbieta Kuźma et al. :Predictors of dementia misclassification when using brief cognitive assessments. Neurol Clin Pract. 2019 Apr;9(2):109-117. doi: 10.1212/CPJ.0000000000000566.

財団レポート 2

SCN 研究の進捗状況報告（2018年度研究内容）

Social Community Nursing (SCN) 機能を発揮する基盤形成プロセスの明確化と SCN 機能を発揮している看護職による地域活動が地域住民へ与える影響の検討

当財団では、設立当初から、「Social Community Nursing (SCN) 機能に関する研究委員会」を立ち上げ、在宅療養者を支えるために必要な機能について、検討を進めています。2018年度は、A 市において SCN 機能を発揮している看護職（以下 SCNs）の地域活動に焦点を当てて、以下2点について検討しました。

- **SCNs が SCN 機能を発揮するために必要な、地域の基盤を整えるプロセスはどのようなものか**
- **SCNs による地域活動が地域住民へ与える影響とは何か。**

2018年度の研究結果を、学会にて発表しましたので、その様子を報告します。

(1) 第11回アジア・オセアニア国際老年学会議 (The 11th IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2019)

2019年10月23日から27日に台北市で開催され、アジアとオセアニア諸国から、医師、看護師などの医療従事者や研究者が3000人以上参加した学術学会で、口演発表を1題行いました。概要は以下のとおりです。

・Older adults' involvement with hospital-led community activities was associated with higher sense of security in living in the community

（和訳：地域在住高齢者の病院主体の地域活動への参加と、高い安心感の関連）

地域高齢者において SCNs による地域活動への参加経験と、「医療や介護に関する安心感（必要な時に適切な医療や介護サービスを受けられ住み慣れた生活を続けられて安心だと感じること）」の関連の検討を目的に、A 市に居住する高齢者2,000人を対象に質問紙調査を行いました。その結果、SCNs による地域活動の中でも、健康相談など、地域住民個人を対象とした活動へ参加経験があると「医療や介護に関する安心感」が高いことが明らかとなりました。医療従事者による地域住民を対象とした地域活動は新しいアイディアだったという指摘や、活動資金に対する課題についてのコメントなどを、インドや台湾からの参加者よりいただきました。

（2）第39回看護科学学会学術集会

2019年11月30日から12月1日に石川県金沢市で開催され、全国から約4000人の看護職が参加した学術集会で、ポスター発表を2題行いました。概要は以下のとおりです。

・SCNs が地域と協働して活動するためのプロセスの明確化　－1事例の分析から－

SCNs が自治会役員と協働して活動するようになったプロセスを明らかにすることを目的に、インタビュー調査を行いました。その結果、SCNs は、まず自治会の役員になるなど自治会の地域活動に住民として積極的に参加することや、地域のために貢献する意思を積極的に自治会役員に伝えていました。そして、SCNs と自治会役員の関係性が住民へと繋がり、相互的な関係性が醸成されていることが示唆されました。SCNs が、まずは住民として地域に溶け込む必要があるという内容に興味を持たれる方が多い印象でした。

・地域在住高齢者の「医療や介護に関する安心感」に関する質的研究
－医療従事者による地域活動に着目して－

地域に住む高齢者において「医療や介護に関する安心感」に影響する要因を、SCNs による地域活動に着目して検討することを目的にインタビュー調査を行いました。その結果、高齢者において、医療機関と関わりながら生活をする中で、SCNs による地域活動へ参加を通して、健康への意識を高めることが、「医療や介護に関する安心感」を高める要因のひとつになっていたことが窺われました。安心感に影響する要因は人それぞれなので、SCNs による活動は幅広い内容が求められるだろうというコメントや、SCNs の後継者の育成に関する意見をいただきました。

本調査にご協力いただいた皆様、及び関係者の皆様に深謝申し上げます。SCN 機能に関する研究委員会では、SCN 機能を地域に拡大・普及していくことが必要と考え、今年度も研究に取り組んでおります。

2019年度研究報告書は7月末に、財団ホームページ（http://www.orangecross.or.jp/）に掲載します。

【研究委員会】
田中滋（埼玉県立大学　理事長）、山本則子（東京大学大学院　医学系研究科　教授）、大森純子（東北大学大学院　医学系研究科　教授）、堀川尚子（日本看護協会　医療政策部　在宅看護課　社会保険・調査研究担当専門職）

【Working Group】
山本則子（東京大学大学院　医学系研究科　教授）、大森純子（東北大学大学院　医学系研究科　教授）、五十嵐歩（東京大学大学院　医学系研究科　講師）、津野陽子（東北大学大学院　医学系研究科　講師）、野口麻衣子（東京大学大学院　医学系研究科　助教）、目麻里子（東京大学大学院　医学系研究科　助教）、稲垣安沙（東京大学大学院　大学院生）、姉崎沙緒里（東京大学大学院　大学院生）

一般財団法人
オレンジクロス

あの日もらった力が、
今の私を動かしている

第6回

看護・介護
エピソードコンテスト

テーマ「伝えたい！わたしの看護・介護エピソード」

オレンジクロス大賞（1編） 30万円

優秀賞（3編） 10万円

募集期間 2020年2月3日（月）～5月7日（木）
（郵送の場合は当日の消印まで有効）

表彰式 2020年7月17日(金) 14時～
場所：TKPガーデンシティPREMIUM京橋

当日午前中、受賞者は選考委員の秋山正子氏がセンター長を務める「マギーズ東京」の見学、秋山氏との懇談会もあります。

選考委員

秋山正子氏
暮らしの保健室 室長
認定NPOマギーズ東京
センター長
（第47回フローレンス・ナイチンゲール記章受章）

川名佐貴子氏
介護福祉
ジャーナリスト

溝尾朗氏
JCHO東京新宿メディカルセンター
院長補佐、内科診療部長
患者サポートセンター長

応募字数・書式 400字以上2400字以内、A4横書き（手書き不可）

応募資格 日本国内で、看護・介護に携わっている方（個人・団体は問いません）

提出書類
① 応募用紙 …… 一般財団法人オレンジクロスホームページ（http://www.orangecross.or.jp/）の応募フォームから印刷してください。
② エピソード本文 …… Word形式の原稿データ

応募方法
メール info@orangecross.or.jp
郵送 〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6F
一般財団法人オレンジクロス「看護・介護エピソードコンテスト係」宛
※詳細は一般財団法人オレンジクロスホームページ（http://www.orangecross.or.jp/）でご確認ください。

お問い合わせ
一般財団法人オレンジクロス「看護・介護エピソードコンテスト係」
03-6228-7216 info@orangecross.or.jp

【注意】個人情報及び著作権の取扱い並びに審査対象外作品等について、弊財団ホームページで、応募要項を必ずご確認のうえご応募ください。
（http://www.orangecross.or.jp/contest/application/index.php）

一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける個人・法人の賛助会員を広く募集しています。

●賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円　法人会員（1口）100,000円

●期　　間：毎年7月1日 ～ 翌年6月末日

●賛助会員特典：① 各種情報提供
② 広報誌の配布
③ 各種セミナーの無料招待
（セミナーの内容は裏表紙をご参照ください）

●申し込み方法：財団ホームページ『賛助会員について』から
申込書をダウンロードしていただき、FAXにてお申込みください
http://www.orangecross.or.jp

（アイウエオ順）

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	https://www.cosmos-group.co.jp/care
株式会社ツクイ	https://www.tsukui.net
株式会社デベロ	http://www.develo-group.co.jp
株式会社福祉の里	https://www.fukushinosato.co.jp/
株式会社やさしい手	http://www.yasashiite.com
公益財団法人 星総合病院	http://www.hoshipital.jp
社会福祉法人 伸こう福祉会	https://www.shinkoufukushikai.com/
社会福祉法人 新生会	https://www.sun-village.jp/
日本生活協同組合連合会	―――

（2020年1月現在）

一般財団法人オレンジクロス　2020年度セミナー等のご案内

● 第6回オレンジクロスシンポジウム　参加費無料

日　　時：2020年7月17日（金）14時～17時30分（14時～14時45分はエピソードコンテスト表彰式）
会　　場：TKPガーデンシティPREMIUM京橋
演　　者：座　　長：山本則子氏　（東京大学大学院医学系研究科教授）
　　座　　長：野口麻衣子氏　（東京大学大学院医学系研究科助教）
　　五十嵐歩氏　（東京大学大学院医学系研究科講師）
　　大田章子氏　（脳神経センター大田記念病院研究員）
　　中山法子氏　（糖尿病ケアサポートオフィス代表）
　　☆シンポジウムをより充実するために、上記の方々のほかにも演者をお願いする予定です。
演　　題：**枠を越え地域を創る Social Community Nurses**
概　　要：地域住民の抱える健康問題は複雑化の一途を辿っており、既存の医療・介護の枠組みに則ったケアでは、地域住民のニーズへの対応に限界が生じています。そこで、本シンポジウムでは、既存の枠組みに囚われずに、地域のニーズを拾い出して活動を行なっている看護職たち（Social Community Nurses）を紹介します。それぞれの活動を紹介してもらうと共に、地域包括ケアの実現に向けて、Social Community Nurses をどのように活用し発展させてゆくのかを考え、議論します。

● 2020年度オレンジクロスセミナー

・第1回　賛助会員無料　一般参加1,000円

日　　時：2020年4月10日（金）15時～17時
会　　場：TKP東京駅日本橋カンファレンスセンター
演　　者：メディカル・ジャーナリスト　西村由美子氏
演　　題：テクノロジーの進化という視座から考える高齢者の暮らし・高齢者のケア
概　　要：あらゆる分野で技術革新が加速しています。スマートフォンは我々のコミュニケーションだけでなく我々の行動全般を変え、ともなって日々の暮らし・働き方さらには人と人との関わり方までもが大きく変わりました。医療も介護も例外ではありません。加齢の機序の科学的な解明が進めば、高齢化がそのまま老化を意味する時代は終わることになります。変化の推進エンジンは技術進化ですが、制度も政策も法も倫理も技術進化のスピードに追いついていません。21世紀の高齢者は単により長い人生を生きるだけではなく、否応なく、ロールモデルのない人類未踏の人生を生きなければなりません。高齢者の暮らしとケアの未来構想は、制度・政策あるいは現在の高齢者の実態からだけでなく、テクノロジーの進化という視座からも考えられる必要があります。

第2回のセミナーは9月、第3回のセミナーは11月に開催予定です。
詳細は逐次財団のホームページ (http://www.orangecross.or.jp) にてご案内します。
なお、上記の内容等は予告なく変更になる場合がありますのでご了承ください。

一般財団法人
オレンジクロス

広報誌 オレンジクロス｜春号 2020 SPRING VOL.08｜2020年2月1日発行
発行：一般財団法人オレンジクロス
〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216
http://www.orangecross.or.jp/

VEGETABLE OIL INK
Waterless Printing. Naturally.
本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」を採用した環境にやさしい印刷物です。